

〈解答〉

- ① 1 しずかに
 2 (1) 〔例〕絶望 (2) ウ
 3 (1) 15 (行め) (2) A 我慢 B 迎えにくる
 (3) 〔例〕励まそう (4字)

配点 ① 2 (1)、3 (1)(3)は各2点、他は各1点 10点満点

〈解説〉

① 傍線①の「とつぜん不意に」は、「思いがけなく起こるさま」や「何のまえぶれもなく、短い時間に起こるさま」を表し、「不幸や悲しみの事件」が、対応することができないほど急激に起きることを示唆している。その対義語として使われているのは、詩の1行目にある「しずかに」で、この場合の「しずかに」は、「ゆったりとしているさま」「慌ただしくないさま」「落ち着いているさま」を表し、「夕ぐれ」が、少しずつゆっくりと近づいてくることを表現している。

② (1) 「闇」とは、「光がない状態」のことで、詩の12行目の「小さな銀貨のような光」が「希望」の比喩であることから、「闇」⇩「光がない状態」⇩「希望がない状態」⇩「絶望」と発想をつなげていく。

(2) 「放り込んでしまう」の主語は「不幸や悲しみの事件」であり、「無造作に投げ入れらる」という動作の主体を、人間以外のものとして表現していることに注目する。人間以外のものを人間に見立てて表現する表現技法を「擬人法」という。

③ (1) 15行目の一行を第2連から離し、第3連として構成していることから、「負けるな」という言葉に、この詩の作者の思いが込められていることを読み取る。希望を見いだせずにいる人たちを、元気づける言葉はさまざまあるが、作者は、それらすべてを「負けるな」という端的な言葉に凝縮して、自分の思いを伝えようとしているのである。

(2) 詩の10行目から14行目に注目する。作者は、絶望的な状況に陥っている人々に対して、「我慢していればよい」と助言した上で、「我慢」をしていれば、「小さな銀貨のような光」⇨「希望」が、「迎えにくる」と言っているのである。絶望的な状況に陥っている人々は、弱り切っていて、とても自分から「希望」を見いだすことなどできない。そこで、自分で「希望」を見いだそうとするのではなく、苦しい一時期を我慢してさえいれば、希望のほうから自然とやってくるに違いない、という作者の考えが、「迎えにくる筈だ」という言葉によって表現されていることを読み取る。

(3) C の直前に、「強い気持ちや生きる勇気を与えようとしている」とあるのに注目する。「励まそう」のほかに、「力づけよう」「応援しよう」「支えよう」などでもよい。